

子どもの経験を階層的に生かす幼小連携カリキュラムの開発 (2)

井上 弥 朝倉 淳 石井 信孝 井上 由子
江本 繁子 掛 志穂 中山美充子 宮本 浩嗣
村上 忠君

1 はじめに

幼稚園と小学校の連携の必要性は、1989年版「小学校学習指導要領」において生活科が創設されたことによって、より現実的なものになっている。最近では、幼小連携の実践研究も盛んである。しかし、それらの多くは、幼と小の連絡会や交流学習の実施に留まっている。いわゆる小一問題やかかわり体験の不足などの今日的な教育課題に対応し、実質的に機能する幼小連携のためには、教育内容を柱とする連携が不可欠であろう。

本研究は、幼小連携研究の歴史を持つ広島大学附属三原幼稚園（以下、三原幼稚園）及び広島大学附属三原小学校（以下、三原小学校）での実践を事例として、幼稚園（3歳から5歳）と小学校低学年（第1学年から第3学年）の教育内容を子どもの経験の蓄積という観点から見直し、子どもの経験が階層的に生かされるカリキュラムとして提案することを目的とする。そのために、小学校教科の再構成を含む幼小連携カリキュラム（試案）を編成し、実践を通してその成果と課題を明らかにする。そして、カリキュラムを修正、改善した上で、幼小連携カリキュラムとして提案する。本小論では、カリキュラム（試案）の一部とそれに基づく実践について考察し、その効果と課題を示す。

2 子どもの経験を階層的に生かすカリキュラム

2.1 経験を階層的に生かすカリキュラムの編成原理

「経験を階層的に生かす」とは、子どもが、発達に適した体験、その時期に必要な体験を積み上げることであり、それが経験として後の学習に活用されるようにすることである。三原幼稚園・三原小学校（以下、三原学園）では、学園の信条、社会情勢、子どもの実態などから、小学校3年生段階でのめざす子どもの姿を「身のまわりのものや人に積極的にかかわり、自分

でいろいろなことに取り組むことができる子ども」と設定している。これを目標概念として、子どもの経験を階層的に生かすカリキュラムを編成する。

本研究では、現行の教育課程を基礎に、小学校の生活科、音楽科、図画工作科、体育科を中心に考察してカリキュラムの編成にあたる。研究初年度より、次の3点をカリキュラムの編成原理としている。

- ① カリキュラムの領域は、現行の教育課程に準ずるが、一部に新しい内容も含める。
- ② 対象とした教科の構成は、内容面ではなく機能面を重視して再構成する。
- ③ 内容の配列については、発達段階に応じて、その時期に必要な内容を置くとともに、内容の特性に応じて、繰り返し学べるようにする。また、幼稚園の年少から小学校第3学年までを範囲として、内容の系統を考察し、配列する。

2.2 小学校低学年の教科構成

小学校第1学年及び第2学年の教科構成を、「国語」「算数」「発見」「表現」「体育」「音楽」「図工」の7教科とすることにした。

「発見」科（以下、発見科）の設定理由は、次のとおりである。

「身のまわりのものや人に積極的にかかわり自分いろいろなことに取り組む」には、そのきっかけとなる「驚き」や「不思議」が必要である。また、取り組みのエネルギーとなるようなおもしろさや楽しさ、喜びが必要である。さらには、このような取り組みの経験としての達成感や成就感などが必要である。これらに結びつくかかわりの内容や方法は、発達段階によって異なる。適切な体験が蓄積され、経験として階層的に生かされることが必要であろう。このような理念に基づき、特に小学校第1・2学年に発見科を設定することにした。

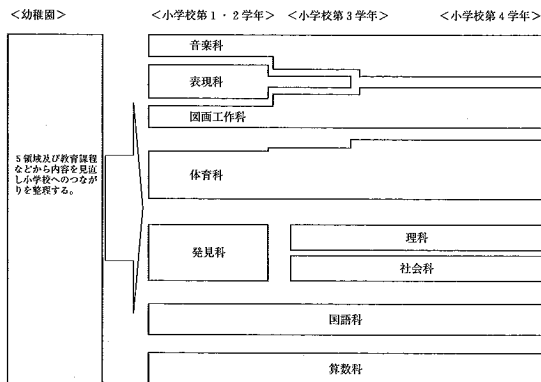


図1 教科の構成図

一方、「表現」科（以下、表現科）は、発見科と同様の発想に基づきながら、表現の側面に焦点を当てたまとまりである。豊かな表現力の育成のためには、幼稚園・小学校低学年の時期に、多様な体験によって、受動的に、また能動的に諸感覚を十分に活用し磨くことが必要である。その際、諸感覚は、多くの場合、別々にではなく並行して総合的に活用される。そして、そこで得たものや想像したものは、いろいろな方法で表現される。このようなプロセスをふまえるならば、諸感覚を用いる活動や多様な表現活動を柔軟に構成することができるようなまとまりが適切であろう。そこで、音楽科、図画工作科と体育の一部を同一の枠組み内に統合し、小学校低学年に表現科を設定した。これは、幼稚園での「総合的に子どもの力を育む」という教育理念を、小学校低学年に引き継ぐ意味も有する。

発見科、表現科の新設による、小学校第1学年から第3学年までの教科構成は、図1のようになる。

3 「発見科」における単元開発

3.1 「発見科」の目標

教科の名称は、これまで「環境科」から「?!チャレンジ科」を経て、「発見科」となった。そのいきさつについては、「環境科」は、子どもたちの活動や体験などが展開される教育環境全般をさしていたが、環境問題の学習と混同されやすいために変更された。そして「?!チャレンジ科」（はてな なるほどチャレンジ科と読む）となったが、教科の名称として長い、記号がわかりにくい、チャレンジという言葉が、総合的な学習の時間において「○○にチャレンジ」というように単元の名称として使われることが多い。などの理由により「発見科」という名称に変更になった。これは、学習課題は子どもたち自らの「発見」であること、学習を通して多くの発見を行なうこと、学習を通

して学んだことは、子どもたちにとって新たな発見であることなどの理由により、教科名称を「発見科」と呼ぶことにした。

そして発見科では、自然事象や社会事象に対する子どもの経験を階層的に生かすことによって、認識の基礎を育みたいと考え、次のような総括目標を立てた。

身の回りの自然や地域社会にかかわる体験活動を通して、それらに対する愛着を抱くとともに、自然や地域社会の事象の特性や関係の理解につながる認識の基礎や、自ら活動を起こしたり見通しを持って行動したりするための実践力の基礎を養う。

この目標は小学校第1学年・第2学年発見科の教科目標でもある。

3.2 「発見科」の教科内容

幼稚園での保育内容や小学校第3学年での教育内容を見据え、発見科に次の4つの領域を設けた。

- 飼育・栽培…小動物の飼育や花や野菜の栽培
- 遊び（自然を感じる・ものづくり）…季節ごとの自然を感じる遊びを行ったり、身近にあるものを利用してものを製作したりする。
- 公共…公共物や公共施設を調べたり、利用したりする。
- 仕事…集団生活を営むために行なっている仕事や世の中の仕事について、経験したり調べたりする。（※ここでいう「領域」は、幼稚園での5領域を指すものではない。）

この4つの領域は、活動や単元を作る際の視点であり、一つの活動や単元に複数の領域の目標が関連することもある。

発見科の大きな特徴は、目標を認識の基礎に置いているために「分かる」という段階を大切にしていることである。これまでの生活科では、「できる」「できるようになる」ことが重要視され、子どもたちは「分からなくてもできている」ようになっていた。しかしそこには、子どもたちの興味・関心はあるが必要性が薄い。より生活に生きてはたらくためには、必要性が大切であり、「できる」ためには「分かる」ことが大切であると考えた。よって発見科では「認識の基礎」を育む教育内容で構成している。

3.3 単元「カタツムリ大けんきゅう（生き物には？がいっぱい）」（小学校第1学年）

3.3.1 本単元の目標

（愛着）探したりに遊んだりすることで、カタツムリに対する親しみを抱かせるとともに、カタツムリに合った世話の仕方を考えて継続的にかかわることがで

きるようにする。

(思考) バッタやカマキリなどの虫と比較することによって、生息場所や体の作り、食べ物などの特徴に気付くことができるようにする。

(表現) 生き物を見つけた場所を簡単な地図に示すことによって、分布の特徴に気づくことができるようにする。

見つけたことや伝えたいことがよく分かるように、絵や文などで表すことができるようにする。

(実践力) これまでの虫の飼育の経験を生かしてカタツムリの世話をするとともに、カタツムリに関する疑問を調べるための方法を試してみることができるようにする。

3.3.2 本単元の構成

この単元は、「飼育・栽培」の領域を中心とするものである。本単元を19時間扱いとし、次のように構成した。

- 第1次 秋のカタツムリの予想・確認 (2時間)
- 第2次 カタツムリを見つけて飼おう (2時間)
- 第3次 カタツムリと遊ぼう (2時間)
- 第4次 カタツムリの?をときあかさそう (5時間)

1時(疑問の交流と分類)

2・3時(進み方の予想と実験)

4・5時(実験結果のクイズづくり)

(国語科「しろう・つたえよう」)

- 第5次 自分の?を調べよう(実験) (3時間)

- 第6次 見つけたこと・考えたことをクイズで表そう (4時間)

(国語科「しろう・つたえよう」)

- 第7次 カタツムリをどうしよう (1時間)

3.3.3 本単元における体験と生かされる経験

本単元での主な体験は、「カタツムリの探索」「カタツムリとの遊びや世話」「観察や実験」「話し合い活動」「クイズ作り」である。

生き物の探索、生き物との遊び、世話は、幼稚園や小学校1学年7月までの体験が経験として生かされるものである。幼稚園での自由遊びやまとまった活動の中で、てんとう虫、バッタ、カマキリなどの庭にいる小さな生き物とかかわっており、虫取り、虫との遊び、図鑑での飼い方調べ、家作りなどの体験や、1学年での7月の「虫と仲よしになろう」の学習での、友達とかかわりながらバッタやカマキリを探したり遊んだりする体験が、カタツムリの探索や長期間の飼育や視点を定めての観察・実験に生かされる。

小集団や学級全体での話し合い活動や、文章や絵を用いての記録・クイズ作りは、1年生にならなければできない活動であるとともに、第2学年以降の学習に

発展するものである。

3.3.4 本単元の認識に関する考察

疑問を抱くと、人は疑問の対象をより観察したり、対象に関連する情報に敏感になったりする。疑問を抱くことは、子ども自身が事象の特徴を自分で見出すことにつながり、認識の芽の育成を行うことになる。ここでは、本単元の学習を通して子どもたちが抱いたカタツムリに対する疑問について考察する。

単元前(約1ヶ月前)、単元直前、単元後の3回での同一の質問(「カタツムリのことで、?とおもうことをおしえてください。」)に対する自由記述の回答(児童数38名)を、疑問の機能面と内容面に視点をあてて考察する。疑問の機能面は、事実を問うもの(何か。)理由を問うもの(なぜか。)実践を問うもの(どうすればよいか。)という3点で分類した。疑問の内容面は、カタツムリの体のつくり、行動等に関して分類した。

表3-1、図3-1、図3-2及び記述内容等から、次のような結果が得られた。本単元の学習を通して、

表3-1 疑問を抱いた人数及び一人当たりの疑問数の変化

	単元前	単元直前	単元後
疑問総数(個)	22	27	149
疑問を抱いた人数(人)	21	23	37
一人当たりの疑問数(個)	1.04	1.17	4.03

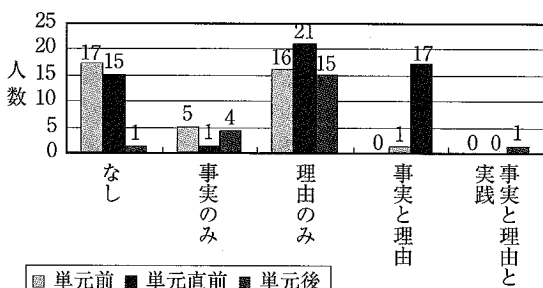


図3-1 「疑問を抱いた人数の変化(機能別分類)」

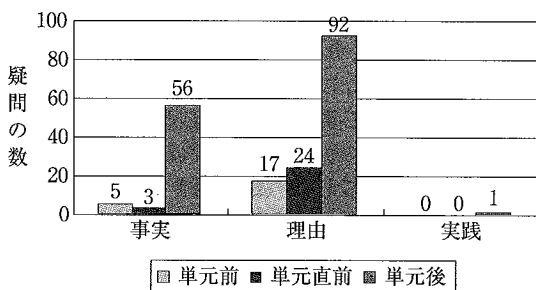


図3-2 「疑問数の変化(機能別分類)」

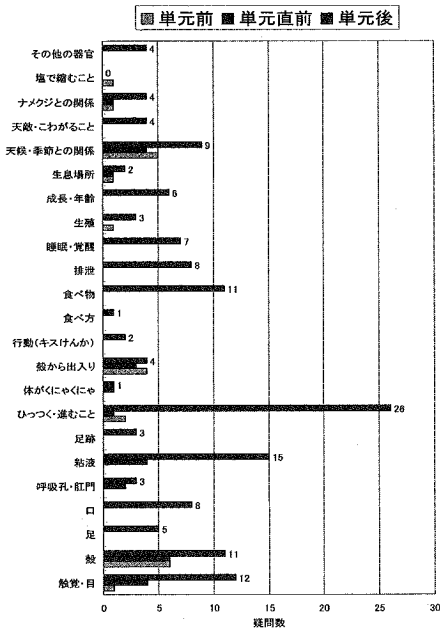


図3-3 「疑問数の変化(内容別分類)」

カタツムリに関する疑問を抱く子どもの数が増加し、一人あたりの疑問数の平均は、約1個から約4個へと増加している。疑問の機能面を見ると、事実と理由の両方に関する疑問を抱く子どもが増える割合が高くなっている。また、疑問数全体は、約5.5倍に増加し、中でも理由に関する疑問のしめる割合が高い。単元後に一人だけ疑問を記述していない児童がいたが、単元の最中の日記には、殻の大きさや固さの理由に関する疑問や食べ物の種類の事実に関する疑問の記述が見られた。実践に関する疑問は、一つだけ記述されていた。それは、「どうすれば、カタツムリを殻から出すことができるのか。」というものであった。

疑問の内容面は、図3-3から次のような結果が得られた。本単元の学習を通して、疑問を抱く内容の中が広がっている。単元後の疑問数の多いものを見ると、教師が意図的に取り上げた内容に関する疑問(ひつつくこと・進み方、天候・季節との関係)、カタツムリの特徴的な体のつくりに関する疑問(粘液、触覚・目、殻、口、) 図鑑などに載っていることを実験したり、観察したりする中で新たに見いだした疑問(食べ物、排泄、睡眠・覚醒)といった傾向が見られる。

3.4.1 保育「みつけた(虫眼鏡を使って、虫になったつもりで園庭を探検しよう!)」(幼稚園年長)

3.4.2 本単元の目標

「園の自然に体全体で触れたりじっくり見たりする

楽しさを味わう」

3.4.3 教材について

本日の「マイクロハイク」は、自然物にふれて遊ぶネーチャーゲームの一つである。ふだん何気なく遊んで過ごしている園庭や草むらの上に1メートルほどの糸をおき、そこを虫眼鏡を使い虫になったつもりでじっくりとたどっていくという活動である。そうすると、今まで気づかなかった不思議な世界に気づいたり、新たな発見をしたりして、じっくり見ることの楽しさを味わうことができる。虫眼鏡の使い方については、危険がないよう指導をしておく。本日は園庭の草や虫などをじっくり見る活動であるが、これから先は、見る対象が園庭の木や部屋にあるおもちゃ、生き物、人など様々なものに移っていくであろう。そして、それらを見て発見するという経験が重なるに連れて、子どもたち自身が探究心や知的好奇心を持って周りの物や人にかかわろうとする力や意欲を生じさせていくと考えられる。

3.4.4 本単元の発見の実際

はじめに今日遊んだ園庭の自然とのふれあいの経験や感動を表現しあった。その後、あの草の中は虫たちにとってはどんな世界なのだろうと関心をもてるように、「マイクロのたんけん」(好奇心一 月かがくのとも 1994年11月)の読み語りをした。そして、自分がなりたいた虫になり、外に出てコースをつくり、じっくりゆくり見ることができるようにかかわっていった。また、共に活動する中で、同じ目線に立ち子どもの驚きや発見の心の動きと一緒に感動するように心がけていった。次は、そのときの様子とそれ以降の子どもたちの様子である。

「きてきて、たまごを見つけたよ。すごいっちゃいんじゃけど、なんかのたまごなんよ。」と裏庭から走ってきて教えてくれたa女とb女。また、「茶色くて、きらきらしとるんよ。あれは絶対蜜よ。前、カブトムシにあげたじゃん。」と、男の子を前にして得意げに話しているc女の姿もあった。その他にも、園庭の草むらに入って探検していたA男は「うわあ、ジャングルみたい。木みたいなのがいっぱいじゃね。」と驚いて報告してきた。いつも活動的なB男とC男は「なんか、おるんよ。この虫のすみかかね。」と木の小さな穴とアリによく似た虫(オレンジの模様のある虫)を見つけて興奮気味であった。活動の時には周りより少しテンポがゆっくりなD男も「ありがおった、ありがおったよ。」と嬉しそうに報告してきた。次の日に、そのD男が「鉄棒の下についとる水がきらきらしようる。虫眼

鏡でみてみようか。」と積極的に虫眼鏡に関心を見せ、使っていた。そして発見したのである。「あれえ、さかさまにうつとるよ！」それを聞いたまわりの子も「見せて見せて。」と興味津々。水の不思議さに加え虫眼鏡というものを媒体にして見る景色の様子に驚き、感動しているようであった。また次の日、ふだん口数の少ないd女が登園後、靴箱の近くにあるほうき草のようになったアスパラガスについた水滴を見て「先生、すごいきれい。きらきらしょうるよ。」とにこやかな顔をして伝えてきた。「虫眼鏡でみてみようか。」と誘うと「そうじゃった。」と言って急いで虫眼鏡をもってきて「うわあ、すごいきれい。先生も見てみ。」と、感動した様子。朝登園してきた友だちをすぐに誘って「これ、虫眼鏡で見てみて。すごいきれいなんよ。」と積極的に行動していた。

4 「表現科」における単元開発

4.1 「表現科」の目標

表現科を軸とした幼稚園年少～小学校第3学年にかけての総括目標は、「さまざまな感覚を働かせながら感じ、イメージし、あらわすという一連の表現活動のプロセスを通して表現する力を培うことで、身のまわりのものや人に積極的にかかわり、自分でいろいろなことにとりくむことができる力を育成する」である。小学校低学年表現科の教科目標は「さまざまな感覚を働かせながら感じ、イメージし、あらわすという一連の表現活動のプロセスを通して、表現する力の基礎を培う」と設定した。

「表現科」では、「感じる」「イメージする」「あらわす」の過程を、図4のように捉えている。

3.2 「表現科」の教科内容

幼稚園での保育内容や小学校第3学年での教育内容を見据え表現科では次の4つのつきたい力を設定した。

○感じる力…さまざまな感覚に刺激を受け、そのこ

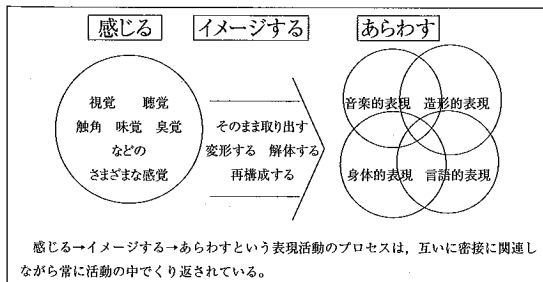


図4 表現のプロセス

とを楽しんだり味わったりできる力。

○イメージする力…類似したものに置き換えたり組み合わせたり変形させたり想像したり予想したり類推したり合成したりする力。

○自分の思いを表す力…一人ひとりが感じイメージしたことを表していく力。(表すためには感じ、イメージするだけでなく、表す方法、技術の習得も必要となる)

○相手の思いを受け止める力・双方向にあらわす力…個々が感じイメージし表したものを受け止める力。さらに複数のやりとりで表現し合い、受け止め合い、刺激しあい、応じ合いながら表現を高めていく力。

この4つのつきたい力を育むため、カリキュラムを作成した。表現科では豊かな表現力の育成のために意図的・計画的なかわりを行う。そして、幼稚園との活動とつなげながら、最終的には小学校第4学年以降の音楽科・図画工作科・体育科・国語科など教科の学習へ発展していく一連の過程の橋渡しとなるような学習内容にする(付表1参照)。

4.3 単元「みんなで楽しむ落ち葉ランド」(小学校第1学年)

4.3.1 本単元の目標

秋には、園庭や校庭にたくさんの落ち葉や木の実などが見られる。このような身近な自然の素材を使って遊んだり、何かをつくったりすることによって、様々な色や形、質感、音などに触れることができる。感じたことを表すことの楽しさや充実感を味わいながら、より豊かに表現したいという意欲や実践力が高められていくであろう。

前単元の「空からの贈り物ってなんだ?」では、天候に左右されたこともあり、体験を通じた表現活動というよりも想像したことをもとに表す活動となってしまうことが課題となった。本単元ではその反省をふまえて活動を仕組みたいと考えた。

本単元では、次のように目標を設定した。

○「落ち葉ランド」で全身を使う活動を通して、視覚、触覚、嗅覚、触覚などの様々な感覚を働かせてたくさんの気づきや感想を持つことができる。(感じる力)

○「落ち葉ランド」での活動から見つけた気づきや感想をもとに「お楽しみコーナー」を作る活動を通して、表したい方法について思い浮かべることができる。(イメージする力)

○「落ち葉ランド」で見つけた気づきや感想をもとに、表したいものを選び、音や色・形、動きなどを組み合わせて友だちと「お楽しみコーナー」を作り上げ

ることができる。(あらわす力)

- 「落ち葉ランド」でお楽しみコーナーを作ったり楽しんで活動を通して、友だちの表し方についてよさを見つけ、そのことを友だちに伝えたり、自分たちの表現に取り入れようとしたりすることができる。(相手の思いを受け止める力。双方向に表す力)

4.3.2 本単元の構成

本単元は、感じる力を育む活動を大切に、落ち葉ランドでの体験が生かされるように、全15時間で構成した。

第1次：「校庭の自然にもっと触れて遊ぼう」

(4時間)

第2次：「遊んだことをもとにして落ち葉ランドでお楽しみコーナーを作ろう」

(8時間)

第3次：みんなで落ち葉ランドを楽しもう (3時間)

4.3.3 本単元における体験と生かされる経験

本単元における中心的な体験は、自然物の感覚を十分に味わうことと、それを活用して遊んだり飾りやおもちゃをつくらったりすることである。幼稚園においても同様の体験は必要であり、繰り返しが意味を持つ内容と言えよう。幼稚園では、素材の特性をそのまま楽しむことが中心であるが、小学校第1学年になると、素材を活用することによって、より細かく具体的に素材の特性を把握することになる。

指導に当たっては、感じることを大切に、イメージしたことを自由な発想で開放的に表現できる場を設定するようにする。そのために木の葉をたくさん用意するようにしたり、活動に浸りきれような時間をしっかり確保したりするようにする。そして、個人やペアであらゆる感覚を働かせるための活動ができるように全身で感じたり、時には視覚を遮断して他の感覚を研ぎ澄ましたりするような活動を意図的に仕組んでいく。表す活動では、感じたことをもとにあらゆる感覚を体験できるようなお楽しみコーナーを作る。その際、感じたことを言葉や音や絵や動きなどに表しやすい環境を作り、様々な材料を用意するように心がける。お楽しみコーナーを楽しむ活動では、友だち同士で楽しむ場を設定し、互いの表し方のよさにきづけるようにする。

4.3.4 本単元における表現の実際

第1次では、全身で落ち葉の感触を味わったり視覚を遮断して嗅覚触覚などを味わったりした。子どもたちは落ち葉集めの際も全身を使って感じる活動をしてきた様子であった。アイマスクをして落ち葉の感触を味わう活動では「アイマスクをして鼻も使ったんだけど、桜餅の匂いがして落ち葉を食べそうになりまし

た。」「大きな葉っぱは匂いが強くて小さい葉っぱはあまり匂わなかったです。」などの感想を持っていた。

第2次では、子どもたちは「お化け屋敷」と「お店屋さん」に分かれ、落ち葉ランドでのお楽しみコーナーを作っていた。「お化け屋敷」では主にダンボールをトンネルにしてつなげ、落ち葉ランドにつながるように作る作業をしていた。ダンボールにも落ち葉をつけて、トンネルの中を通るお客さんが怖がるような工夫を考えていた。「お店屋さん」では落ち葉を使ったリースや落ち葉を使った絵、落ち葉で飾り付けをした輪投げなど売るものやゲームで楽しむものなど、手分けして作っていた。感想には「お店グループはリースやいろんなものをつくっていて、わたしが一ばんすぐかったものはリースでした。またやりたいです。」「きょうおばけやしきに入った人を見て『こわかった。』っていった人がいたのでよかったです。」など違うグループのよさや、お客さんの反応から自分たちの活動を振り返るものが見られた。

4.4 保育「感じてわくわく」(幼稚園年中)

4.4.1 保育の視点とねらい(保育案より抜粋)

子ども自ら感じてイメージを持つことができるよう、五感を刺激する落ち葉や木の実を使って「変身グッズ」をつくる中で、素材の色や形などの不思議さに気づいたり、友だちとイメージを出し合ったりすることを楽しんでほしい。

(ねらい)

- いろいろな友だちと思いを出し合いながら遊ぶ楽しさを味わう。
- 落ち葉の変身グッズづくりを通して、自然物の色や形の不思議さを感じたり、イメージをふくらませて作ったりする喜びを味わう。
- 自分で使った遊具・道具を自分で片づけようとする。

4.4.2 保育の展開(保育案の落ち葉に関する部分を抜粋)

(自然物での遊び)

- ・落ち葉や秋の実などを使って遊べるように穴あけ器、ボンド、ダンボール紙、針金、カップ、ビニールテープなどを用意しておく。それぞれが工夫しているところや楽しんでいるところを認めたり、友だちと見せ合って刺激を受けられるようにかかわったりする。穴あけ器や針金などは、安全に使えるように声かけをする。
- ・集めた秋の自然物を入れるビニール袋やみんなで入れられる大きな入れものを用意しておく。集めた自然物をごちそうの材料に使ったり、組み合わせていろいろな形に見立てたりとイメージを膨らませて遊

ぶ姿に共感したり、保育者も進んで参加し楽しさを味わえるようにする。

〈落ち葉や木の実でへんし〜ん！〉

- ・子どもたちが自分で拾った自然物や、保育者が用意した色や形、性質などいろいろな特色の自然物、カラーポリ袋・冠の輪など必要な素材を各コーナーに用意しておく。
- ・秋の自然で変身するという意欲やイメージが持てるように話をする。
- ・園庭で見つけてきた素材を拾ってきた時には、その発見や気づきを大切に、一緒に共感したり考えたり、さらに自分の作りたいものものどこにつけるかイメージが膨らむよう声かけをする。
- ・一人ひとりのイメージをしっかりと受け止めて認めたり、子どもの話を丁寧に聞いたりする。
- ・作るきっかけがつかめなかったり、イメージがわからなかったりする子どもには、個々に声をかけたり、一緒に作ったりして楽しめるように援助する。
- ・落ち葉や木の実を組み合わせて見立てるなど、イメージを膨らませる姿に共感したり、友だちに紹介したりして友だちのデザインを取り入れたり、さらに工夫したりして遊べるようにする。

5 カリキュラム（試案）における効果と課題

5.1 「発見科」における認識の芽

〈小学校の実践について〉

抱く疑問の種類も数も増加し、事実だけでなく理由に関する疑問を抱くことができたことは、より事象をみつめ、関連する情報を集めようとする活動につながり、気づきが認識へと深まる過程を示している。実践に関する疑問が一つだけであったことは、設問が、「カタツムリのことで、？とおもうことをおしえてください。」というものであり、カタツムリそのものについての疑問と捉えられる問い方になっていたということ、本単元の学習内容が、目的実現に関する内容が少ないということが影響していると考えられる。厳密に疑問を調べていくなれば条件の統制など実践的な疑問が生じてくるが、1年生の子どもたちはまだその段階にいたっていない。

関連単元の「虫となかよくなろう」で学習したバッタやカマキリとの比較は、質問紙の回答の記述には表れていない。カタツムリの特徴的な形態に関する疑問は、これまでに学習してきた生き物とは違った特徴に着目しているといえるが、自覚して比較しているとはいえない。自分の体や貝やナメクジと比較しての疑問の記述が見られたことから、比較する対象がすぐ近くにあることや類似しているが多少の違いがあるもの

など、比較の対象に何を提示することが有効か考慮することが必要である。

愛着の面では、カタツムリに対する感情を4段階（とても好き、まあ好き、あまり好きではない、きらい、中央値2.5）で尋ねたところ、平均値が、単元前2.34、単元直前2.36、単元後2.71となり、全体的にはカタツムリに対する感情はプラスになっている。単元後にきらいと答えている子どもたちは8人おり、感触の気持ち悪さを理由にあげている。しかし、この子どもたちの疑問数の平均は、単元前0.6個、単元直前1個、単元後5個となっている。また、活動中の様子や日記などの記述から見ると、カタツムリの行動にかわいらしさを感じたり、疑問を確かめるための実験や観察に興味をもって取り組んだりしており、全く否定的というわけではない。

思考の面では、疑問に関して考察したように事実や理由に関する疑問を抱いて活動し様々な特徴に気付いている。

表現の面での、絵地図から分布の特徴をつかむことは、学級全体で一度行っただけのふれる程度であり、今後各自が地図を用いて読み取ったり、表したりする体験を積み重ねていくことが必要である。

クイズの内容は、一般的なカタツムリについての記述ではなく、一人ひとりが自分で見たこと、確かめたこと、考えたことを文章と絵で表していた。保護者や友達に向けてクイズと解説をかこうという設定にしたため、読み手のことを意識しながらクイズを作る姿が見られた。

実践力については、これまでの経験や図鑑・インターネット等で調べたことをもとに飼育ケースの環境づくりやえさやりを行っていた。また、進む速さを調べるためにストップウォッチを用いて計測したり、好きな食べ物調べでは、食べ物とカタツムリの距離をそろえるために、円周上に食べ物、中心にカタツムリを置いたりするなど工夫を行っていた。

〈幼稚園の実践について〉

（認識の基礎）虫眼鏡を使うことで、草がジャングルに見えたり、ふだん気づかなかった木の穴や木についているものを発見したりできた。また、鉄棒についた水滴に映る景色がさかさまになっていることに気づくことで、水の面白さに興味を持って遊んでいた。このような驚きや発見は認識の基礎につながると考えられる。

（表現）見つけたものを嬉しそうにまた、得意げに保育者や友だちに知らせる様子が伺えた。今後も、子どもと同じ目線に立ち子どもの驚きや発見の心の動きと一緒に感動するように心がけていく。

(実践力) 次の日以降も、虫眼鏡を使っただけでなく、対象物を詳しく見るために虫眼鏡を使っている様子が見られた。これらは、自ら興味があるものに意欲的に関わっていく姿であると考えた。今後も、子どもたちが試行錯誤しながら遊べる環境を整えていく。

(愛着) 木の穴に虫のすみかを見つけたり、不思議なたまごを見つけたり、夏にカブトムシにあげた木の蜜を見つけたりと、子どもたちには楽しい発見の連続であった。このような楽しい体験が対象物への興味を持たせ、愛着を深めていくと思われる。また、その後も虫眼鏡などを使って繰り返し遊ぶことにより、自然や生き物に対する愛着が深まると考えられる。

5.2 「表現科」における表現力

○保育としての評価項目

幼稚園では、総合的な表現活動について次のような15項目で興味関心を調査していく。その際、3歳児(年少児)・4歳児(年中児)については、項目にかかわる様子を見取って保育者がエピソードとして記録していく。年長児については、15項目について「よくある」「たまにある」「あまりない」「ほとんどない」の4段階で一人ひとり評価していく。

	項目
1	没入して、みたりきいたりさわったり味わったりしているか
2	周りの変化によく気づくか
3	ものが変化していく様子に関心を示すか
4	先生や周りの友だちのまねをしているか
5	先生や友だちのまねではなく、自分でやろうとしているか
6	何かになりきって話をしたり表現をしたりすることがあるか
7	自分のイメージを言葉や動きで伝えようとするか
8	先生に確認をとりたがるか
9	のびのびと表現しているか
10	表現した後の表情がよいか
11	こだわりをもって表現するか
12	工夫して表現するか
13	表現したことを先生や友だちに見せたがるか
14	友だちと一緒に表現する中で、自分の思いを出しているか
15	友だちの表現のよいところを認められるか

○授業としての評価

小学校では次の項目について、題材を終えた後に4段階および記述によるアンケートをとって調査する。

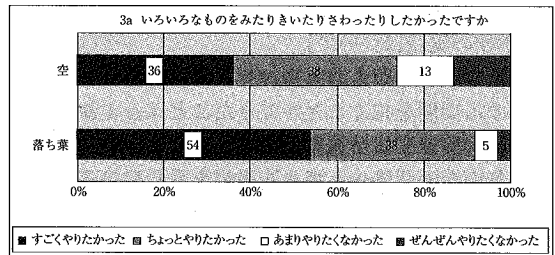
今回は、幼稚園も小学校も「落ち葉」を題材に保育・授業を行い、内容的にも連携を図ることができた。以下は、小学校について述べる。

	項目	
1a	このかつどうは、おもしろかったですか？	4段階
1b	おもしろいことを、いくつみつけましたか？	記述
2a	またやってみたいですか？	4段階
2b	つぎのかつどうではどんなふうにやってみたいですか？	記述
3a	いろいろなものをみたりきいたりさわったりしたかったですか？	4段階
3b	どんなものにみたりきいたりさわったりしたいですか？	記述
4a	かつどうしていて おもしろいことをみつけましたか？	4段階
4b	それは、どんなことでしたか？	記述
5a	なにをしようか じぶんで おもいつきましたか？	4段階
5b	どんなことを、おもいつきましたか？	記述
6a	ともだちとちがうことを おもいつきましたか？	4段階
6b	どんなところが ちがっていましたか？	記述
7a	ともだちに みせるのは たのしかったですか？	4段階
7b	ともだちのはっぴょうをみるのはたのしかったですか？	4段階
8a	ともだちの おもしろいところを みつけましたか？	4段階
8b	いくつ みつけましたか？	記述
9a	ともだちと ちからをあわせることはたのしかったですか？	4段階
9b	どんなふうに ちからを あわせましたか？	記述

〈小学校の実践について〉

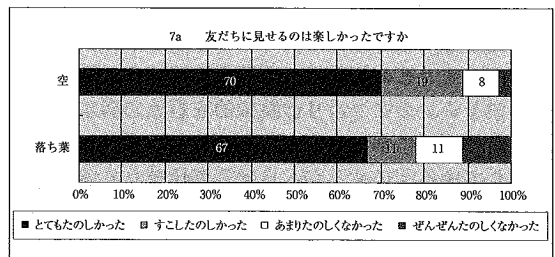
本単元を終えて、アンケート調査を行った。

以下は前単元と比較した3a 7a 7b 6aのグラフである。

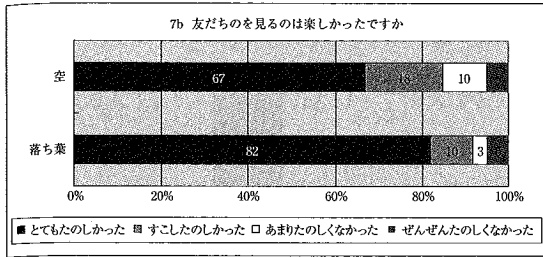


〈項目3a〉

項目3aでは「すごくやりたかった」「ちょっとやりたかった」を合わせた数値が前単元より18%増えた。このことから、感じる活動で様々な感覚をつかって体験を積み重ねたことでより感じる活動への意欲が喚起されたと捉えることができる。



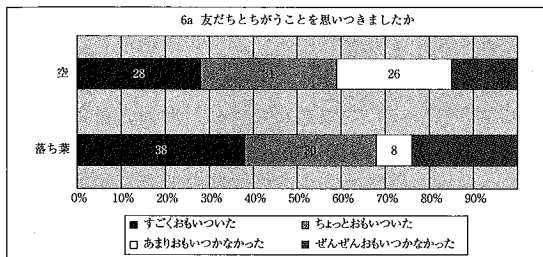
〈項目7a〉



＜項目7b＞

項目7a, については前回より「楽しかった」「少し楽しかった」の割合が11%減り, 反対に7bについては6%増えていた。このことから, 相手の活動をほとんど見ることなく活動していたため, 相手のグループの活動内容により興味をもち, お楽しみコーナーでの活動を楽しむことができたのではと捉えることができる。

上記の項目で前單元において, あまりよい結果が得られなかった項目6aについてはつぎのような結果が出た。



＜設問6a＞

この設問については, 7月に行った「空からの贈り物ってなんだ」の活動と比べて「すごく思いついた」「ちよとおもしろかった」を合わせた数値が9%増えたことがわかる。このことから, 自分から自発的に表したいものが思い浮かんだ子どもが増えたことが伺える。しかし, 「ぜんぜん思いつかなかった」の部分だけ見ると9%増えているので, 今回は自発的に考えるより友だちに影響を受けながら表していった子どもたちが前回より増えたとも捉えられる。感じる活動に時間を確保しようとしたことで表したいと思う子どもが増えた反面, 感じたことと表すことにつながりを持ちにくかったり, 強い思いを持っている友だちについて行くだけになってしまったりした子どもの姿がここから伺える。課題の与え方や環境設定など今後の課題と

したい。

5.3 カリキュラム(試案)の課題

「発見科」, 「表現科」について, それぞれ単元開発を行うことができたが, 今後両教科の関連, 及び, 他教科との関連なども整理し明確にしていく必要がある。また, 幼稚園と小学校が上記の教科以外に連携する必要性のあるものについて, 吟味しなくてはならないと思われる。

また, 立てたカリキュラムに沿って保育・授業を行っていく中で, 縦断的あるいは横断的に整合しているか否かについて気づきを持ちながら題材開発を行うことができた。「発見科」「表現科」を経験した子どもたちがどのような力をつけたのか, この教科を設定したことでのどのような有効な姿がみられるのかについては今後の課題とした。

6 おわりに

幼小連携というと子どもの交流に注意がむく中, 「発見科」「表現科」を中心に教育内容の連携を考えることができた。小学校につながる幼稚園, 幼稚園からつながる小学校という見方から, 教職員がそれぞれの所属の教育内容について見つけ直すことができたことは, 一つの成果である。幼小連携の意味はこのような教職員の意識改革にもあると思われる。

単元開発では, 幼稚園と小学校の学びのつながりを意識しながら, 発見科においては生き物を題材としたものを, 表現科においては落ち葉を題材としたものを, 開発を行うことができた。

今年度は評価についても取り組んだ。研究の評価として, 今年度当初, 小学校第1学年から第4学年までを対象に発見科では自然科学認識と社会科学認識についてアンケート調査を行った。今後カテゴリーごとに分析を進め, 来年度当初に同じような評価を行い子どもたちの変容をみていきたい。また, 表現科でも小学校第1学年から第4学年までに課題を与えそれをビデオ撮影し評価していく方法で調査を行った。これも来年度当初に同じような調査・分析を行い子どもたちの変容をみていきたい。

今後, さらにカリキュラムの修正を加えながら, 子どもたちの経験を幼稚園から小学校低学年までの学びを整理し, それが階層的に生かされる実践を積み上げていきたい。

総合表現・表現科 目標系統・題材配列一覧表

年代	総合目標			
	年少	年中	年長	第1学年
感じる力	・出会うものなどからかわい、美しい、怖い、大好きなど自ら感じるようになる。	・自分から周りの変化に気付く ・かわい、美しい、怖い、大好きなど子ども自ら感じるようになる。	・園生活の中さまざまなものから感じる。 ・面白、不思議、怖いなど、自分なりに感じるようになる。	・さまざまな感覚を働かせる活動を通して、感じたことを一人ひとり自分の中に蓄積することができる。 ・いろいろな感覚を使ってバランスよく働かせることができる。
イメージする力	・遊びの中で体験したことを通じて、イメージを取り出して意味づけができるようになる。	・遊びの中で体験したことを通じて、イメージを持って遊ぶことができる。	・遊びの中で体験したことを通じて、イメージして遊ぶことができる。	・さまざまな感覚を働かせて感じたことをそっくりそのまま取り出し、自由に変形したり、解体したり、再構成したりすることができる。
つたい力	・自分一人で、全身を使って思いを表現し、自分なりに工夫して遊ぶことができる。	・自分一人で、全身を使って思いを表現し、自分なりに工夫して遊ぶことができる。	・自分一人で、全身を使って思いを表現し、自分なりに工夫して遊ぶことができる。	・イメージしたことを組み合わせて表現したり、別の方法で表現したりして楽しむことができる。
受け止める、双方向の力	・周りの大人に思いを受け止め、知らう心地よさを知る。	・少すつ周りの人の気持ちに共感することができる。	・周りの人のよさや気持ち、状況などに共感することができる。	・友達との表現方法を互いに共有し、相手の思いを受け止めていくことができる。
総合的な表現・表現科の活動	自然物を使って遊ぼう！ 砂・土・水で思いっきり遊ぼう！ 泥や絵の具でぬりたりくりをしよう 製作遊びをしよう	ままごと 忍者ごっこ ごっこ遊びをしよう！ エルマーとりゅうごっこ	飼育小屋にいったらみよう みんなであそびたいよ みんなであそびたいよ みんなであそびたいよ	空からのおくり物ってなんだ 冬を感じよう 生き物みんな生まれ！ みんな忍者なろう！ 恐怖ランドにいこう！
				友達との表現方法を互いに共有し、相手の思いを受け止めていくことができる。 友達との表現方法を互いに共有し、相手の思いを受け止めていくことができる。 友達との表現方法を互いに共有し、相手の思いを受け止めていくことができる。